

がまたとても楽しそうなのです。池上先生は、いつお目にかかっても、こちらも愉快的気持ちになる先生でした。今、その時の標本が私の手許にあります。石沢先生の御好意で、私が学生時代に採集した標本は、そっくりそのままに現在、国立科学博物館の標本庫に保管されています。私が採集した標本と、同じ1963年6月15日付けの池上先生採集の標本が出てきました。先生が、あの時、説明された通りに、標本を科博へ寄贈されていたのです。それから、ある時、また海岸へ行く採集会がありました。この時は私の家からあまり遠くない藤塚浜という所でした。砂浜の湿地に淡い赤紫色の可愛らしい花を沢山つけた高さ1mばかりの草本がありました。池上先生は、例の楽しそうな様子で「これは、いいものがあったね。バシクルモンという北方系の珍しい植物だよ」と教えて下さいました。それ以来不思議なことに、バシクルモンが心に残りました。1985年に縁があって中国西域の天山を訪れる機会がありました。あの三蔵法師が天山を越えたと伝えられるアスクという町はずれをながれるタリム河の岸辺で、バシクルモンを見つけました。私にはすぐにそれと分かり、また池上先生との採集会のことが思い出されました。そして、今年は、バシクルモンを目的に、また西域のタリム河流域の砂漠へ行っ

てきました。日本のある製薬会社がバシクルモンに睡眠を助ける効果を見つけ、それを利用しようという調査です。砂漠でバシクルモンとの再会を果たして、帰国後に標本庫を見ると、1962年6月24日に採集した私の標本が出てきました。実は、アズマツメクサより、バシクルモンの採集の方が先だったのです。この標本には、沢山の開花中の花がついています。この標本と同じ場所で同じ開花中の池上先生採集の標本も出てきました。こちらは1954年7月11日採集です。アズマツメクサとバシクルモンの思い出と標本は、池上先生にお世話になった証しです。標本を手にしなが、心から先生に御礼を申し上げたいと思います。有難う御座居ました。また、心より御冥福を御祈り申し上げます。

私は今年3月末で国立科学博物館を定年退職します。在職した約10年で、70万点程の標本を20万点近く増やすことができました。また、地方的な植物相の調査にこだわってきました。現在、最後の仕事として、昭和天皇が調査された伊豆須崎の植物相の再調査の結果のとりまとめを急いで居ります。池上先生のお教を心のどこかに置いて来たつもりです。改めて御礼を申し上げて筆を置きます。

2005年11月4日

池上先生のこと

笹川通博

池上先生は私にとって、他の人とは全く違った、特別な人であった。今こうして追悼の文章を書こうと、何か思い出すように努めているが、直に接する機会はそれほど多くはなかった。しかし、先生からは非常にたくさんのことを学び、影響を受けた。私が行く学校での授業も、先生の話し方を真似ている面があると思う。講話や一緒になる機会があると、先生からできるだけ多くのことを学びたいと思い、近くにるように努め、耳をそばだてた。聖人君子に従う、弟子のような気持ちであった。書物の中の人物ではなくて、尊敬できる人に初めて巡り会えたと思った。県外出身の私は、先生と出会えて、それだけで新潟に来て本当によかったと思った。先生が亡くなられて、私自身も心の柱を一本失い、職場である学校も、社会全体も、大きく激しく流れ、それに自分も流され、先生が持っておられた確かな普遍的なものを、見失っている自分を感じる。

新潟大学の学生だった頃、「新潟県植物分布図集」の原稿を書くと、石沢先生を通して池上先生に渡り、ボールペンの小さい赤字の上に、更に青字で直されて戻ってくる。当時の私はまだ物事がよく分からず、身の程知らずなところもあったので、自分なりに書き直して提出すると、また、細かいところまで赤字、青字で直される。よくよく考える

と、確かに、そのように直した方が元の文章よりはるかによい。どんな小さい文章でもそうであった。言葉や文章に対して、大変厳しかった。助詞、助動詞の使い方や、受動態、能動態、言葉の順番、時制など、文章を書くということは、相当の覚悟が必要であると、その時初めて知った。池上先生からは、「七回は直すものだ。」「直された原稿は大切に取っておく。」「頼まれても人の文章は直すものではない。後で恨まれる。」「裏付けの文献を探すのがどれほど大変か。」といったことを、のちに何回もお聞きした。じねんじょ会の植物調査の夜、そんな時でも、ろうそくや懐中電灯の明かりのもとで、先生が熱心に誰かの原稿に赤字や青字を入れておられる姿を、今も鮮明に思い出す。また、私が高校で非常勤講師をしている頃、通勤の越後線の列車の中で、先生と乗り合わせたことがあった。あいさつの言葉を二言三言交わしただけであったが、先生は時折あたりに厳しい視線を投げながら、何か文学関係の文庫本を熱心に読まれていた。「新潟県植物分布図集」の原稿を書く時、池上先生が見て下さるのだからと、甘えてしまった面もあった。

植物に対しても同様であった。どんなありふれた植物でも、池上先生にかかれば、様々な不可思議が説明され、ほ

んの数百メートルを歩くのでさえ、かなりの時間がかかった。ミゾソバを引っぱり出して、閉鎖花ができることを教えてもらい、目から鱗の落ちる思いをした。ミヤマベニシダの鱗片がゴキブリの羽に似ていると言う説明も、印象に残っている。私は学生時代、水草の勉強をしていたのだが、ヒルムシロ属などは、神戸大学の角野先生に標本を送って同定していただいていた。ある時、池上先生から、「教えてもらうのもよいが、自分の力でやりなさい」というような意味のことを言われた。自分の甘えに恥じ入ったと同時に、先生の独立自尊の気概を感じ、尊敬の念を深くした。じねんじょ会の植物調査では、私は先生と一緒に最後尾を歩くことがよくあった。深い山の中ならともかく、田んぼや畑の畦を歩くと、近くの人に怪しまれ、植物を採取するものだから、最悪の場合、二人で一緒に怒られたことも何回かあった。そんな時、先生といえども逃げ出そうとしたことがあったのを思い出すと、ちょっと可笑しくなる。

私が高校教員として新潟市の近くに就職してから、時々、先生を車にお乗せして、じねんじょ会の植物調査に行くこともあった。帰りの別れ際に、先生が植物分野を分担執筆された「菱ヶ岳」の本を頂いたこともある。車の中に何か忘れ物をして、それを先生のお宅まで届けたこともあった。車中で先生はいろいろな話をなされた。あるアメリカ人が日本に来て、「ありがとう」を伝えたい時は「ワニ(アリゲーター)」と言え、と教えられていたのが、うっかり「クロコダイル」と言った、という小話から、アリゲーターとクロコダイルの違いを説明された。「世界的な」という言葉を何回も口にされた。地方にいても、大学や研究所などの学者、研究者という職業になくても、確かな視点と努力があれば、世界的な研究や仕事はできるのだということであった。また、植物は「道楽」であり、学校の仕事をおろそかにしてはいけない、ともおっしゃった。学校に

勤めるものとして、それは今でも肝に銘じている。新潟市の植物資料室にある標本については、年を経る毎に深く心配されていた。新潟のハーバリウムを日本有数の、それこそ「世界的な」ものにする夢を、繰り返し語られた。学名の意義、標本の大切さ、人を育てる重要性、外国のハーバリウムの様子、新潟市の対応など。「新潟では杉とおのこは育たない」と言うことわざも、先生から初めてお聞きした。

私の二校目の勤務先は、佐渡の相川高校であった。奇しくも、旧制の相川中学校にかつて先生もいらした。うろ覚えであるが、博物、農学の担当として、同窓会名簿に先生の名前が載っていたと思う。その他には先生を偲ぶものは何もなかった。校舎も鉄筋であり、当時のものではない。美しい、あるいは厳しい、佐渡の景色を校舎の窓から眺めながら、時折、先生がいらした頃の佐渡、相川はどんな風だったろうかと思った。今より鮎山も町も盛んだっただろうか、子どもたちはどうだったろうか、自然や景色は変わらなだろうか。四年間佐渡にいてから下越に戻ったが、年に一度のじねんじょ総会でしか、先生の話を書く機会はなくなった。体が思うようにならなくなる中で、標本やハーバリウム、じねんじょ会のことなど、自分の思いがなかなか人に届かず、さぞかし歯がゆかったらうと思う。先生は音楽もできると人から聞いたことがある。その昔、オルガンを弾きながら、小さい子どもたちと一緒に歌を歌ったのであろうか。そのような情景が、私には妙に思い浮かぶ。ある夏の終わり、私は新潟の海岸の植物を調べていた。日も暮れかかり、少し疲れて、砂丘の真ん中でぼんやりしていると、大きなザックを背負った年配の、それでいてがっしりした体格の男性が、グミ原のどこからか現れ、砂丘をいくつも越えて、ずんずん歩いて行くような、そんな気がした。池上先生には海が似合うと思う。

池上先生有り難うございました 〈むかご 第12巻：2003年から復刻〉

奈良場 正 一

ご一緒させていただいたなかで、矢代川、切齒尾根などがとくに印象に残っています。重いリュックサックを背負い、野帳の記録をしながらも、わざわざ名前を呼んで下さり、懇切丁寧にご指導いただきました。素人の小生のレベルアップを、常に気にかけていただいたような気がしません。

また総会の度に何回も、標本の束をいただきました。これは分布図集記録でよくあった、吉原正秀氏の旧宅(三島町七日市)に愛蔵標本が残っており、ご遺族が役立つようなら使って欲しいと云われ、池上先生のところに運んだ標本の一部で、重複するものを下さったものでした。標本を

挟んだ新聞の余白には、ラベル記載事項が細かい文字で、きちょう面に転写してありました。

自分の標本や資料の整理に忙殺されそうなか、今思うとこれまた感謝の気持ちでいっぱいです。

調査会の担当で、お世話させていただいたときなど、何の変哲もない場所で、すまなく思っていると、終わりにはいつも「あ一面白かった。勉強になった。有り難うございました。」と云われ、それでどんなに救われたか、肩の荷が下りほっとしたものでした。

最後にお会いしたのは、2年前の総会だったと思います。宿題を仰せつかりました。「アサガオとオオイタドリ